住宅に刻まれる家族の歴史

ーバンコク郊外の高床式住宅の変容に関する一考察ー

A FAMILY'S HISTORY INSCRIBED IN THEIR HOME:

The changing residential space of a high-pillar house in suburban Bangkok, Thailand

岩城 考信*

Yasunobu IWAKI

This paper examines patterns of spatial change among high-pillar house in suburban Bangkok. Until now, most research by Thai and Japanese architectural scholars has focused on the correspondence between increasing family members and expanding residential space through the addition of new buildings. They tend to assume a simple explanation of spatial change through the addition of buildings and an increase in family members. Following my field survey of a Bangkok suburb, however, it is clear that there is also another important and contrasting pattern—that of decreasing residential space through the moving and reconstructing of houses such as when a son marries into another family. Furthermore, following the birth of children and their marrying out of or marrying someone into the family, the residential space for a single two-generation family can simultaneously decrease and increase.

Keywords : Addition to building, moving and reconstruction, high pillar house, Thai House, Bangkok, kinship
増築, 移築, 高床式住宅, タイ住宅, バンコク, 親族関係

1. 序論

1-1. 高床式住宅を巡る言説と疑問

バンコクを含む中部タイの伝統的な住宅形式は、タイ住宅に代表されるような^{注1)}、寝室や台所等の複数の棟によって構成される高床式住宅である(写真1)。中部タイの高床式住宅を扱った先行研究ではその空間変容の特性として、家族の増加や子供の独立に応じて棟の増築が繰り返され、住空間は拡大すると指摘されてきた^{注2)}。しかし、この指摘に従えば疑問が生じる。

それは家族の増加に応じて棟の増築が進むということは、複合家族的な共住関係が複数世代に渡り継続的に維持され、住宅は拡大し

続けるのか、という疑問である。

例えば「1932/33 年測量地図」^{注3)}を持って、バンコク郊外のチャオプラヤー川西岸地域(以降トンブリーと記す)を踏査すれば、当時と比べて棟数が増加しているケースもあるが、逆に相続に伴う他所への移築によって減少しているケースも少なくない。

タイ住宅は部材の接合には、釘を使わず、込み栓や簡単な継ぎ手等によって加工されており、壁は竹やニッパ椰子を編み込んだ網代やチーク材で作られたファー・パコン(Fa Pakon)と呼ばれるパネルで構成される(写真2)。中部タイでは他所で住宅を部材単位で作り、それを現場で組み立てる独自のプレファブ構法が発展してきたのである。このプレファブ構法は同時に建築の解体も容易にし、移築のための移動性も担保する^{注4)}。しかし、タイ住宅を含む高床式住宅を対象とした先行研究では、移築に関する技術的研究や移築による住宅の空間構成の変容、その社会経済的な背景に言及するものは、ほとんどない。

また、中部タイの農村を調査した北原淳氏は、タイの農村で広く見られる結婚後の子供達が親の屋敷地もしくは隣地に居住する「屋敷地共住集団」^{注5)}における複合家族的な構成は、親と子の独立世帯の結合によってもたらされるが、「親が死亡し、屋敷地と耕地の均分相続が完了すると、たとえ兄弟世帯が近接居住していても、共同

上: 写真1 タイ住宅(ノンタブリー県の事例)

右: 写真2 ファー・パコン

* 法政大学大学院工学研究科 博士後期課程・工修

Doctoral Student, Graduate School of Engineering, Hosei University, M. Eng.

的機能は著しく弱まり、複合家族は基本的に分解する」と事例をもとに明らかにしている^{注6)}。北原氏の「同一敷地内での共住の要となる人物＝親の消滅によって、共住関係は崩れてゆき、それぞれに新たな「屋敷地共住集団」を形成していくという指摘は^{注7)}、屋敷地という住宅とは異なるレベルを対象としたものであるが、タイ住宅に代表される高床式住宅においても適応が可能であると考えられる。住宅に適応すれば、親の存命の時には子供は新しく住宅を増築し、空間の増加が起こり、そこでは複合家族的な共住が行われ、各家族が利用する複数の棟により構成されるルアン・ムーが形成される^{注8)}。親の死後、兄弟姉妹関係に基づく共住関係は崩壊し、それが居住者の他所への移転とそれに伴う住宅の移築の要因となり、一時的に拡大したルアン・ムーでは空間の減少が起こる。そして、各自がその子供達と新しいルアン・ムーを形成する。こうして住宅の空間は増減を繰り返すのではないかと、という仮説が生み出される。

1-2. 目的・方法

本稿では上記の仮説に答えるべく、高床式住宅の空間構成の変容について、増築による空間の増加のみならず、住宅の移築等による空間の減少にも着目しながら考察を行う。同時に、住宅の変容には親族構造との連関が考えられるため、親子という二世世代だけの考察では不十分であり、複数世代間の世帯の独立と住空間の変容の連関に対して事例を提示しながら詳細に考察を行う^{注9)}。これら考察を通して、高床式住宅の空間変容の形式とその背景を明らかにすることが本稿の目的である。

バンコク都市部にはタイ住宅を含め、現存する高床式住宅は少ない。また、現存するものの多くは非血縁者に借家として賃貸されており、住宅と親族構造の関係性、及びその変遷を知ることが出来るケースはさらに少ない。そこで本稿では親族関係を軸に居住される高床式住宅が、多く現存するトンブリーの事例を調査対象とした。

調査時期は2002年7月、8月と06年の3月から4月、6月、10月であり、現地では筆者が実測及びタイ語で聞き取り調査を行った^{注10)}。タイ国立公文書館や国立図書館には関係する一次史料がほとんどなく、これまで研究対象とされて来なかったトンブリーを研究する上で、聞き取り調査は家族の来歴と住宅の空間構成の変遷を知る上で重要である。しかし、居住者の記憶に頼る聞き取り調査では、住宅

の移築や増築、改築が行われた時期に関して曖昧な回答を得ることが多い。そこで本稿では調査対象住宅の選定と住宅の空間構成の変容時期の判定に年代の異なる複数の地図を積極的に利用した。本稿を進める上で利用した地図は、「1908年印刷地籍図」(1/4000)^{注11)}、「1932/33年測量地図」(1/5000)、「1960年代地図」(1/1000)^{注12)}、「1996年航空写真」(1/6000)^{注13)}、「2006年地籍図」(1/1000)^{注14)}である。考察の過程では地図の判読と聞き取り、実測調査を相互に参照しながら移築や増築、改築の時期を判定している。

1-3. タイ住宅の空間構成

まずタイ住宅と呼ばれる伝統的な高床式住宅の空間構成及び個々の空間の名称や機能を紹介しておきたい。

タイ住宅は高床式住宅であるから、まずバンダイ(Bandai)と呼ばれる階段を上り、チャーン(Chan)と呼ばれる屋根のない屋外空間に至る^{注15)}。さらにラビアン(Rabiang)という庇が架かった半屋外空間に至り^{注16)}、三方もしくは四方を壁で囲まれたホン・ノーン(Hong Non)と呼ばれる寝室やホン・ブラ(Hong Phra)と呼ばれる仏間にいたる。この外から内へと続く一連の空間的な流れに沿って、空間のプライバシー性も外から内へと高くなる(図1^{注17)})。

チャーンとは、海拔2mほどの低湿地に立地するバンコクにあって洪水や湿気、蚊や獣から人々の暮らしを護り、台所や寝室を含む棟と棟を繋ぐ人工地盤の役目を担っている。ラビアンとは、チャーンより200~400mm、高くなった建物の前に設置された庇のある空間である。ラビアンでは食事から接客、就寝といった日常行為から儀礼に至る様々な行為が行われる。冠婚葬祭といった儀礼時には僧侶や階級、年齢の上位の者がラビアンに座り、下位の者が一段低いチャーンに座る。つまり、ラビアンとチャーンの段差は社会階層を可視化する機能をも担っている。

2. 土地と建物の所有の変遷

2-1. 事例の概要

本稿で扱う事例は、周辺に未だ果樹園が残るトンブリーのK運河沿いに立地する^{注18)}。そのK運河沿いで2002年7月現在、5つの寝室棟によって構成される〈KI01〉とそこから派生し、7つの寝室棟によって構成される〈KI02〉という2つのルアン・ムーを調査対象

図1 タイ住宅の平面及び断面図

図2 〈KI01〉と〈KI02〉の平面及び断面図

図3 〈KI01〉と〈KI02〉の居住者の家系図

とした(図2)。彼らの祖先がいつ、いかなる理由でこの地にやって来たのか、という入植時期とその背景は不明であるが、〈KI01〉に住む古老 Th 氏らからの聞き取りによれば 19 世紀中頃から現在に至るまで 8 世代、延べ 80 人に及ぶ人々が主に果樹園業を生業としながら、〈KI01〉と〈KI02〉に居住してきたことが明らかとなった(図3)。現在〈KI01〉には、第5世代から第8世代の4世代、17人が居住し^{注19)}、〈KI02〉には第6世代から第8世代の3世代、11人が居住する。

「1908年印刷地籍図」では、現在〈KI01〉が立地する場所に何らかの建造物があったことは判読できるものの、住宅の詳細については判らない。一方「1932/33年測量地図」を見ると、現在の〈KI01〉の立地する所にはチャーンを挟み3つの棟によって構成される住宅があり、〈KI02〉が当時まだ建設されていなかったことが判る(図4)。本稿では住空間の変容に関して空間変容が頻繁に起きた1930年代から70年代初頭までを主な考察の対象とした。

2-2. 1908年から2006年の土地と建物の所有の変遷

K 運河沿いの最古の地籍図は、「1908年印刷地籍図」である^{注20)}。その後の地籍図は「2006年地籍図」となる。よって1908年以降、分筆や合筆を経て現在に至る土地所有の過程を段階的に考察できる資料は今のところ見つかっていない。そこで聞き取り調査と新旧の地籍図をもとに土地所有や個々の建物の所有の変遷について概観したい。

「1908年印刷地籍図」によると20世紀初頭には、現在〈KI01〉と〈KI02〉の立地する土地は、1筆で12549.05㎡(約7.8ライ)であった^{注21)}。西側にはラーマ五世時代(1868-1910年)の官僚貴族で第1世代にあたるクン・イン(Khun In)もしくは彼の子弟の地所、7254.7㎡(約4.5ライ)があった^{注22)}(図5)。

第2世代にあたるクン・インの次女チャン(Chan)と現在〈KI01〉と〈KI02〉の立地する土地を所有していた第1世代の夫婦の息子が結婚し、彼らがそれぞれの両親の土地を相続し、2つの土地が1つの家族の所有地となったと考えられる。チャンは第3世代にあたる4人の子供を持ち、その中で未婚の長女と既婚の次女が〈KI01〉に残り、住宅周辺の土地2筆を相続したと考えられる。第3世代の次女は、第4世代にあたるプロ(Phro)とユアン(Yueang)という2人の娘を持ち、西側のクン・インの元の土地と〈KI01〉周辺の地所(962.6㎡、約0.6ライ)はプロに相続され、〈KI01〉周辺以外の東側の土地(11586.46㎡、約7.2ライ)はユアンに分割相続された^{注23)}。当時の敷地境界は、図5のようであったと推察される。

図4 「1932/33年測量地図」に見る〈KI01〉

図5 1908年の敷地境界線と第4世代の土地所有

図6 2006年の敷地境界線と土地所有

〈KI01〉周辺のプロの土地は、その後、第5世代にあたる彼女の三男家族に相続された。その後クン・インから続く西側の地所の80.6%にあたる5848.74㎡が非血縁者に売却され、残った土地が現在〈KI01〉に住む第5世代のCh氏と第6世代にあたる彼女の子供によって所有されている。一方、ユアンの相続した東側の土地は、第5世代にあたるユアンの七女に相続された。ここでも土地の76%にあたる8871.1㎡が非血縁者に売却され、現在に至っている(図6)。

続いて、〈KI02〉における個々の建物の現在の所有を概観する。〈KI02〉が立地する土地は、ユアンの七女の娘、第6世代のT氏に所有されているが、個々の建物は、それぞれの居住者に所有されている。ただし〈KI02〉では個々の建物の所有権は、公の権利書によって担保されたものではない。親族間の話し合いによって個々の建物の所有権を認め合っているのである。それゆえ、仮に建物が他所に移動されるとしても、地主であるT氏は文句を言うことはないということである。つまり、この〈KI02〉の事例から、彼らは住宅を

図7 1938/39年以前の〈KI01〉の空間構成

図11 1960年代半の〈KI01〉と〈KI02〉の空間構成

図8 1938/39年頃の〈KI01〉と〈KI02〉の空間構成

図12 1970年代初頭の〈KI01〉と〈KI02〉の空間構成

図9 1938/39~42年頃の〈KI01〉と〈KI02〉の空間構成

図10 〈KI02〉の歴代の居住者と居住棟

単に不動産としてだけではなく、同時に動産としても捉えていると考えられる。この住宅を動産として捉える考え方も住宅の移動性を担保していると推察される。

3. 住宅の空間構成の変遷

3-1. 1938/39年から42年頃の〈KI01〉の空間構成の変容

〈KI01〉に生まれた第3世代の次女は結婚し婿を迎え^{注24)}、第4世代となる二人の娘、長女のプロと次女のユアンを産んだ。プロとユアンは結婚した後も〈KI01〉に住み続け、それぞれ複数の子供をもうけた^{注25)}。当時は、図7に示すようなAとi、iiの3つの棟によって構成される住宅であった。1938/39年頃ユアン世帯は、〈KI01〉の北西のタイ住宅Aを40mほど東に移築して^{注26)}、同時にチャーンを挟んで東と北に洋風の装飾を持つ寝室棟BとC、さらに西に台所棟を建設した(図8)。これが現在の〈KI02〉の基盤となる住宅である。ユアンが〈KI01〉から棟を移築し、〈KI02〉の新築に至った理由や^{注27)}、建設費の財源については判らない。

一方〈KI01〉に住み続けたプロには、第5世代にあたる3人の子供(長女、次男、三男)があった。第5世代の長女の結婚を機に1938/39~1942年頃^{注28)}、新婚住宅(Ruean Ho)^{注29)}として新しい棟iiiが増築された。その際、東側のタイ住宅の棟iiを90度回転して〈KI01〉の北東の棟として移築し、南東に洋風の新婚住宅が建設された(図9)。その後〈KI01〉では移築による棟数の減少はなく、若干の増築を加えて現在に至っている^{注30)}。〈KI01〉の空間変容で注目されるのはチャーンに対する棟の配置、すなわち住宅の空間構成が1940年前後に大きく3回、変容したことである。最初は「1932/33年測量地図」で確認できるT字型のチャーンに3つの棟が配置される構成であった。続いて、ユアンの転出とそれに伴う棟の移築により、住宅の空間構成はT字型のチャーンに2つの棟が配置される構成へと変化する。さらに増築が行われ、十字型のチャーンに3つの棟が

配置される構成へと変化したのである。つまり、〈KI01〉の1940年前後の数年間の空間構成の変容から高床式住宅の空間変容は、家族の増加に伴う棟の増築による空間の増加としてのみ捉えるだけでは不十分であり、空間変容のもう一つの形式として、家族の転出とそれに伴う移築による空間の減少もあることが明らかとなる。そして、〈KI01〉では移築による空間の減少後、増築による空間の増加が行われている。この事例から高床式住宅の空間変容とは、空間の増加と空間の減少が交互に行われる、と考えられる。

3-2. 1938/39年から1970年代初頭の〈KI02〉の空間構成の変容

移築と新築によって生み出された〈KI02〉の空間構成は、1930年代末以降、どのように変化したのだろうか。〈KI01〉の事例から得た空間の増加と空間の減少に着目しながら〈KI02〉の空間構成の変遷を見ていきたい。図10は〈KI02〉の歴代の居住者と彼らが住んだ棟の対応関係を表すものである。

〈KI02〉に移ったユアンは、最終的に5男3女、計8人の子供を持ち、〈KI02〉の各棟は子供達の結婚に伴う世帯の独立と共に世帯毎に占有されていくことになる。まず東のC棟がユアンの次女に、南のB棟が四女に占有、利用された。その後1962年頃に南西に五男の新しい住宅、D棟が増築され、チャーンによって〈KI02〉と繋がれた。その後、1964年頃にC棟に住むユアンの次女の長女(第6世代)が結婚するにあたり南東に新しくE棟が増築された。60年代半までは子供達の結婚による世帯の独立と共に、まず既存の寝室棟が与えられた。続いて子供の結婚による独立に際して足りない部分は、増築によって空間を付け足すことで補われていったのである(図11)。

60年代後半には^{注31)}、ユアンの子供達は各々複数の子供を持ち、世帯毎に独立した寝室棟や台所を維持しながらも、空間的に見ればチャーンで連結された巨大なルアン・ムーに同居していたことになる。これは一つのチャーンを軸に親子関係以外の兄弟、従兄弟が同居する、複合家族的な住まい方が展開していたことになる。しかし、その後チャーンを介して直接、往来が出来ないように障壁等が建設され、世帯毎の各棟の空間的独立が生み出された^{注32)}(図12)。

1960年代後半以降に〈KI02〉で行われた世帯毎の空間の独立を可能とした空間操作について、具体的に見ていきたい。空間操作の手法は、大きく二つある。一つは、空間の分割であり、もう一つは空間の分断である。空間の分割とは、チャーンによって繋がれた空間に障壁を建設して、個々の棟毎に空間の独立を生み出す手法である。これは3つの棟に住む3世帯の間、2カ所で行われている。まずA棟とC棟を分ける障壁がそうであり、1970年頃に建設されたA棟とD棟を分ける障壁も同様の機能を担っている。一方、空間の分断は隣接するチャーンを切り取り、かつそこに壁を設けることで空間的な連続性を完全に放棄する手法である。これはA棟とB棟の間で1967年頃行われている^{注33)}(図13)。以上のように〈KI02〉の住空間の構成は、子供達の結婚に伴う増築、つまり空間の増加を経て、その後各棟の空間の独立をめざし、チャーンに障壁を設置したり、チャーンを切り取ったりして空間の分割及び空間の分断が行われた。この一連の流れを、チャーンを介して往来可能な空間の増減として捉えれば、増築によりそれは増加し、その後空間の独立を目指して行われた空間の分割及び空間の分断により減少したと言える。

またA棟に住むユアンの七女世帯は、空間の分割後1970年頃に西側の台所棟を取り壊し、そこを子供達の寝室棟として作り直し、北

図13 〈KI02〉のA棟とB棟の断面図

側に新しい台所を増築している。つまり〈KI02〉の1930年代末から1970年代初頭に至る空間変容の事例から、増加から減少さらに増加へという、世帯の独立と世代交代に伴う住宅の変容サイクルの一つのモデルを読み取ることが出来る。

4. まとめ

〈KI02〉の空間変容から得た知見は、1930年代末に〈KI01〉で起こった移築による空間の減少から〈KI02〉の建設に至る過程を理解する場合にも適応出来る。つまり、1930年代に〈KI01〉で起こった移築と〈KI02〉の建設を捉え直すと、〈KI01〉で起こっていたであろう、複合家族的な住まい方をプロやユアンの世帯は好まず、空間の独立を志向した結果として起こった空間変容と解釈することも出来る。

家族の増加に対応して、住宅の空間構成は変容する。それは増築に伴う空間の増加だけではなく、結婚という世帯の独立に伴う移築による空間の減少や、改築による空間の分断や空間の分割、それによる往来可能な空間の減少を含む複雑なサイクルである。この複雑なサイクルを経て、ある家族が利用できる分立的空間が生み出されるのである。

ただし、本研究が提示したタイ住宅を含む高床式住宅の空間変容のモデルは今後多くの事例を通して、検証する必要がある。また本稿で扱った事例は主に1930年代末からの空間変容を扱ったにすぎない。今後も子供の結婚による世帯の増加や独立を通して住空間の変容は続くと考えられる。そのため今後も継続的な調査を行うことが重要である。

謝辞

本稿の資料の多くは、松下国際財団アジアスカラシップ奨学生として、チュラロンコーン大学社会調査研究所に在籍した2004年11月から06年10月に得られたものである。記して感謝申し上げます。

注

注1) タイ語でタイ住宅はルアン・タイ(Ruean Thai)と呼ばれる。他にバーン・ソン・タイ(Bang Song Thai)という呼称もある。これは直訳すればタイ様式住宅となる。

注2) 例えば、ルタイ・チャイチョンラックは『本来のタイ住宅』(Chaichongrak, Ruethai. *Ruean Thai Doem*. Bangkok: Samakhom Sathapanik Sayam, p.51, 2000)で、ソムポップ・ピロムは『中部のタイ住宅』(Phirom, Somphop. *Ban Thai Phak Klang*. Phim Khrang thi 4. Bangkok: Ongkan Kha khong Kurusapha, p.6, 2002)で同様の指摘を行っている。またスメート・ジュムサイは『タイの伝統的な大家族制では、家族の規模が大きくなり、子供が成長し、独立した住まいが必要になると、ひとつの基本となる両性的ユニットがつけ加えられる。こうした拡張は高床を延長することによって、建築的にも保証される。このように次から次へと住居単位が付け加えられることによって多くの住宅が著しく細長くなっていった』と指摘している(スメート・ジュムサイ, 西村幸夫訳

- 『水の神ナーガ アジアの水辺空間と文化』鹿島出版会, p.145, 1992 年、Jumsai, Sumet. *Naga : cultural origins in Siam and the West Pacific*. Singapore: Oxford University Press, p.102, 1988)。近年では詳細な現地調査に基づき藪崎涼らがバンコクの住宅の空間構成の変容を論じている。藪崎らは「バンコクの住宅の特徴的な現象としては、増築が挙げられる。子供が結婚するなどして家族が増える場合、既存部分に部屋を増築することが多く、この繰り返しのことによって親族が集まって住んでいることが珍しくない」と指摘している(藪崎涼ほか 4 名「陸に上がったナーガ Bangkok—水の都市から陸の都市へ」(『Ten plus one』No.33, p.209, 2003 年 12 月)。これもルタイらタイ人研究者と同様の指摘と見なすことが出来る。
- 注 3) 「Talingchan 4827-4」(国軍地図局所蔵)。本地図は仏暦 2475(1932/33)年に調査測量が行われ、1957 年から 66 年にかけて(地図には仏暦 2500 年と記載、下二桁が未記入)に作図されたものである。現地調査や後述する「1960 年代地図」との比較からこの地図は測量年の 1932/33 年の状況を表していることが確認できた。
- 注 4) ソンポップらは「人々が自身の住まいを変えることを希望し、新しい場が決定した時、住宅は容易に解体される。それから住宅は短時間で組み立てられる。住宅によっては一日で再建されるものもある。この習慣はタイの生活様式の基本である。—中略—例えば、相続人が他所へと居住する、または住宅を寺院に寄進するために解体した場合、住宅は移築される」と指摘している(Phirom, Somphop, Vivat Temiyabandha, Khate Ratanajarana, and Wiroj Srisuro. *Thai houses*. Bangkok: Mutual Fund Public, p59, 1995)。タイ国立博物館にあるデーン御殿(Tamnak Deang)が移築の重要な事例である。「この木造の家は始めラーマ一世の姉君、スィースダーラック王女の住居の一部であったが、ラーマ二世の死後スィースリエーン王妃のためにバンコクの王宮からトンブリの旧宮殿に移された。後に王妃の息子の一人であるピンクラーオ王子がラーマ四世の副王になられた時、昔住んだこの家をワンナー宮殿に移築した」ものである(チラー・チョンコン著、タイ国立博物館ボラントニア・グループ、モンコン・サムラーンスック訳『バンコク国立博物館案内』文部省芸術局考古学・博物館課, p119, 1999 年)。これは王族といった特権階級の事例であるが、市井の人々の間でも同様に移築は頻繁に行われていた、と推察される。
- 注 5) 東北タイでの事例をもとに水野浩一は「子供たちが結婚した後、親との同居期間を終え、一応世帯を別にしたけれども、親が農地(特に水田)を統御しているために、農業生産の面で共同関係が生じ、それを契機として親の世帯家族と子供(しばしば娘)の世帯家族が結合するという特殊な家族形態が生まれる。この場合、子供夫婦は親の屋敷地内に、あるいはそれに隣接して居を構える傾向にあるので、この種の家族形態は「屋敷地共住集団」と呼ぶ」としている(水野浩一『タイ農村の社会組織』創文社, p109, 1981 年)。
- 注 6) 北原淳『タイ農村社会論』勁草書房, p.130, pp.135-161, 1990 年。
- 注 7) 前掲書 p.131 及び p.136 を参照。
- 注 8) チョット・カンヤナミット『芸術及び建築に関する事典』によればルアン・ムー(Ruean Mu)とは「同一の親族の中で個人的に利用するため、同一のグループ内で複数の棟を建て増した住宅」と定義されている(Kanyanamit, Chot. *Photcananukrom Sathapattayakam lea Sintapa Kiaunueang*. Second Edition. Bangkok: Mueang Boran, p.431, 2005)。
- 注 9) 本稿で扱う家系図は年齢に従って左から順に描くことを基本とするが、夫婦に関しては年齢の上下に不明な点が多いのでこれに従わない。文中での子弟に関する記述はまず産まれた順番を、次に男か女かを記載することとする。例えば最初に生まれた女子は長女、次に生まれた男子は次男と記述し、それ以降は三男、四女と記載していくこととする。
- 注 10) 2002 年 7 月と 8 月の調査の結果は、岩城考信ほか 5 名「中部タイにおける住宅の増改築と移築について —チャオブラヤー川流域の都市と住宅その 5—」(『2004 年度大会(北海道)学術講演梗概集』F-2 分冊, pp.279-280, 2004 年 7 月)や法政大学大学院エコ地域デザイン研究所歴史プロジェクトアジアまち居住研究会編『チャオブラヤー川流域の都市と住宅 タイ・水辺都市のフィールド調査 1998-2003』法政大学大学院エコ地域デザイン研究所歴史プロジェクトアジアまち居住研究会, pp.118-121, 2005 年)として発表、刊行されている。しかし、これら既発表論文において記載した親族関係には、筆者のタイ語の理解力不足に起因する二つの誤りがある。第一に子供の数であり、第二に長子と末子の順番を真逆に記載していたことである。その誤りは 2006 年 3 月の補足調査で判明し、4 月、6 月、10 月の再調査を基に修正を行った。本稿は既発表論文の誤りを修正し、新たな分析を加えたものである。
- 注 11) 「Samnao Pheanthi Kha Luang Krungthep Rawang 1To, 4Do(政府地図原本バンコク 1 To, 4Do 間)」(内務省土地局バンコク・ノイ出張所蔵)。この地図には、仏暦 2527(1984)年土地局印刷部印刷とあるが、これは再版年を表すものと考えられる。この地図の西隣の地区を記載した「Rawang 1To 5Do」には、「ラ暦 126(1908)年 10 月 30 日、地図局印刷室(Hong Phim Krom Pheanthi)」と記載されており、本稿で利用した地図もこの年代に準ずるものとした。
- 注 12) 「Krungthep Mahanakhon Pak Khlong Bang Khun In 4628-4」(チュラロンコン大学建築学部図書所蔵)。この地図には地図作製者と作製年が記載されていないが、チュラロンコン大学建築学部図書所蔵の 367 枚中、17 枚に年が記載されている(06 年 7 月 6 日現在)。17 枚の内訳

- は 1959 年 1 枚、60 年 4 枚、67 年 2 枚、航空写真より編集と 1965 年測量に基づき改訂 3 枚である。作成者についての記載は 126 枚に記載されている。内訳は首都警察交通警察部隊地図班 117 枚、地図作成委員会事務所 9 枚である。それゆえ、本稿で利用した地図の作製者を交通警察部隊とし、作製年代は大凡 1960 年代とした。
- 注 13) 「MEA-11/41 No. 142」(国軍地図局所蔵)
- 注 14) 内務省土地局バンコク・ノイ出張所蔵
- 注 15) チャーンとは呼ばずにノーク・チャーン(Nok Chan)と呼ぶこともある。
- 注 16) ラビアンをチャリアン(Chariang)と呼ぶこともある。後述する事例では、ラビアンに相当する空間をチャリアンと呼んでいる。
- 注 17) 図 1 の住宅には台所がない。台所は屋外にあり、料理を使用人が屋内へと運んでいたためである。本稿で敢えてこのタイ住宅を紹介するのは、増築や改築による空間変容がほとんどないため、基本的な空間構成を理解しやすいからである。
- 注 18) この事例を選定するに至った理由は 2 つある。第一に 1960 年代以降、トンブリが道路や住宅地の建設に代表される都市開発の時代を向かえた後も、ここでは周辺環境に劇的な変化をもたらす開発が行われず、現在も高床式住宅が住宅形式として維持されていることである。第二に劇的な都市開発が行われなかったため結婚以外の外部からの転入がほとんどなく、親族関係を基盤とする、複数の棟がチャーンによって繋がったルアン・ムーが現在も多く存在することである。
- 注 19) 調査時には〈KI01〉の居住者の第 6 世代以降の親族関係についても聞き取り調査を行ったが、〈KI01〉の居住者達の意向に従い本稿では記載しない。〈KI01〉では第 5 世代までの空間変容と親族関係を考察の対象とした。
- 注 20) ただし、内務省土地局バンコク・ノイ出張所には、「1908 年印刷地籍図」は保管されているものの、対応する地主台帳は保管されていない。タイでは「王が唯一の土地所有者である」という概念が強く、私的な土地所有権が認められたのは「ラ暦 120 年地券交付布告」(1901 年)から「ラ暦 127 年地券交付法」(1909 年)の制定を経た後である(田坂敏雄・西澤希久男『バンコク土地所有史序説』日本評論社, pp.2-4, 2003 年)。ゆえに本稿で利用した地籍図は最古のものである。
- 注 21) ライ(Rai)、タイの地積の単位。1 ライは、20 ワー(Wa, 1 ワーは 2m)²×20 ワーで 1600 m²。1908 年当時の地積は「1908 年印刷地籍図」と「2006 年地籍図」を比較して筆者算出。
- 注 22) Th 氏からの聞き取りによる。クン・インの所属機関、生年及び没年、享年は不明。
- 注 23) プロとユアンは住宅周辺以外の他所にも多くの果樹園を所有していたが、その立地と総面積については不明である。
- 注 24) 名前、生没年を含む詳細不明。
- 注 25) ユアンは少なくとも七女を生んだ後、何年かを〈KI01〉にプロ世帯と同居していた。これは七女の没年及び享年から生年を算出し明らかとなった。
- 注 26) 仏暦 2485 年頃。Th 氏及び Ch 氏への聞き取りによる。Th 氏は、移築を実際に見ており、その時 8 か 9 歳ぐらいであったと回顧する。移築と住宅の増築に際して中国人を含む 5、6 人の大工が雇われ、彼らが住宅を解体して、〈KI01〉から〈KI02〉へと移築し再建した、という。
- 注 27) 筆者が最初に調査を行った 2002 年には、〈KI02〉に住む第 5 世代はユアンの七女と結婚し、1940 年代末に婿入りしたアンパン氏だけであった。ゆえに 1938/39 年の移築の理由に関する話は聞き取れなかった。しかし理由としては、以下の 3 つが推察される。①姉妹の仲違い②ユアン世帯の子供の増加によって〈KI01〉が手狭になり新居の建設を求めた、③ユアンの娘の結婚とそれに伴う新婚住宅の建設と併せて〈KI02〉の建設を行ったという 3 つの理由である。3 番目の理由は、〈KI02〉の B 棟で生まれ育った男性への聞き取りによる。彼によれば〈KI02〉の B 棟は、彼の母(ユアンの四女)の結婚時に建設された新婚住宅であるという。
- 注 28) 仏暦 2481(1938/39)年から 2485(1942)年頃。Th 氏及び Ch 氏からの聞き取りによる。
- 注 29) 新婚住宅とは「次に継承する新しい家族の住まいとして利用するため、結婚にあたり増築される住宅」である(前掲注 8 の文献, p.432)。
- 注 30) 移築によって生まれた〈KI01〉の北西の空所になぜ増築を行わなかったのかは不明。
- 注 31) ユアン及びプロ夫妻の生年や没年、享年については、聞き取りでは判らなかったが、〈KI01〉の A 棟と F 棟に住む N 氏や T 氏によれば 1960 年代にはユアン夫妻はすでに亡くなっていたという。
- 注 32) 〈KI02〉に残った第 5 世代の次女、四男、五女、七女の 4 世帯は、それぞれ 5 人、8 人、4 人、3 人の子供を持っていた。〈KI02〉に住むインフォーマントらは、1960 年代に入ると各世帯の子供の数が多くなり、子供同士の喧嘩が頻発したため、「マイ・サドゥアック」(Mai Sadueak, タイ語で都合が悪い、不具合といった意味)であり、その結果、第 5 世代の姉妹間で話し合いが行われ、世帯毎の空間の独立が決定されたと説明する。こうして世帯毎の空間の独立を目指して、〈KI02〉の空間構成は変容していくこととなる。
- 注 33) このような空間の分断が行われた背景には、B 棟がチャーンに対して開く構成で配置されており、新たに出入口を増築する必要があったためと考えられる。実際、切り取られたチャーンは北側に移動され、新たな出入口の空間の床材の一部に転用されている。

(2007年11月9日原稿受理、2008年1月10日採用決定)